

特徴をよく捕えた説明、染色体数、成分、分布、興味ある話題などが書かれている。種ごとの説明の前にそれらの種が含まれる属の特徴と種への検索表があり、同様に幾つかの属の前に所属の科の特徴と検索表という組み立てになっている。科の配列は田川・岩槻(1972)の分類系によっていて、いわゆるウラボシ科が細分されている。上記のような各論が本書のほとんどを占めていて、最初に38ページの総論がある。シダ植物は何かから始まり、生活環・無融合生殖、次いで孢子体・配偶体の説明で読者に必要な智識を述べ、次いで多様性・種分化・系統・分類・分布など、最後に植物と人間、絶滅に瀕する種類などが述べられている。この途中に日本産の科の検索表がある。内容豊富で簡明、初心者にもわかりやすく、上級者にも大いに役立つ書物である。(伊藤 洋)

□Camus J. M. (ed.): *The History of British Pteridology 1891-1991*. 127pp. 1991. British Pteridology Society, Special Bulletin. no. 4. £5.0.

全英シダ学協会は100年の歴史を経たが、その機会に100年を回顧する記念論文集を編んだ。とはいっても、厳密に100年史を意図したものではなく、自由に書かれたエッセイを混載した部分もある。プロローグとエピローグは詩の形でまとめられ、全体がシダ植物と人々という部分と協会という部分に2大別されている。最初の部分には10篇の論文が載せられ、化石と実験解析という研究分野別のもの、シダのリストと図説の歴史、景観とシダや保全に関するもの、栽培の歴史とその典型例、それに純粋にシダ学に没頭した巨人 Holttum と、植物学の専門教育を受け、それでいてロック歌手となり、そしてオシダ属の研究に大きな成果を上げている Fraser-Jenkins の自分史と、多様な文章が連なる。Holttum 先生の遺稿はありし日の先生を偲ばせる良い文章である。また、後半の3篇は全英シダ学協会の100年の歩み、覚え書の紹介、歴代会長や幹事長の紹介、それに26枚の歴史を物語る写真とで構成されており、これは綴られた資料篇とでもいうべきものである。博物学の時代から現代まで、アマチュアも専門家も

一緒にシダ学を学び発展させている紳士の国の歩みが伺い知れる楽しい冊子である。英語の文献が読めるアマチュアと、該博な知識に裏づけられながら常に山野を跋渉することに楽しみを享受しようとする専門家が、限られた数の自生のシダからどのように歓びを見出してきたのか、植物と人とのちょっと良い関係を物語る冊子として、いろんな分野の人にお薦めしたい。(岩槻邦男)

□Holttum R. E.: *Flora Malesiana series II vol. 2. part 1. Tectaria Group* 132pp. 1991. Foundation Flora Malesiana. Rijksherbarium, Leiden.

Richard Eric Holttum 氏は、1895年イギリスに生まれ、1922~1954年の間シンガポール植物園を中心に、後 Kew に戻られて主としてシダ植物やラン科の分類学的研究を続けてこられたが、1990年9月に95才で亡くなられた。この Flora Malesiana のシリーズの1冊は氏の最後のまとまった論文で、これまで Blumea 等の雑誌に発表されてきた知見のうち、マレーシア地域のナナバケシダ *Tectaria* 類についてまとめたものであり、ナナバケシダ属やカツムオイノデ属 *Ctenitis* を含む11属が取り扱われている。このうち、最も大きな属であるナナバケシダ属には105種が認められているが、23種が新種であり、これらは新変種(9)、新組合せ(2)と共に *Blumea* 35: 347-557 (1991) に発表されている。

なお、これまでに出版されている Flora Malesiana series II, シダ植物にはヘゴ科、ウラジロ科、ミズニラ科、ホングウシダ科、ツルクジノオ科、フサシダ科、ヒメシダ科がある。(三木 栄二)

□Desikachary T. V., Krishnamurthy V. and Balakrishnan M. S.: *Rhodophyta* 277pp. + pls.1-12+279pp. + figs.1-51+pls.1-41. 1990. Madras Science Foundation, Madras. ¥10,000.

インド紅藻植物誌ともいうべき本で、第1部総論(276頁)、第2部分類編(279頁)から成る。総論は、細胞構造、体構造と生殖、系統、分類体系の4章より成り、最も多く頁を割いた章は体構造と生殖に関するもので、170頁が費される。全

体として光学顕微鏡レベルの記述が多く、最近、紅藻について蓄積が多くなってきた電子顕微鏡レベルの知見の記述は極めて少い。分類編ではウシケノリ亜綱（原始紅藻亜綱）と真正紅藻亜綱のダルス目、アクロケテウム目、カワモズク目、ウミゾウメン目、ガラガラ目、カギノリ目、テングサ目、カクレイト目、ベニマダラ目が扱われる。この第2部はPart Aと記され、残りのサンゴモ目、スギノリ目、マサゴシバリ目、イギス目はPart Bとして後日刊行の予定と聞かすが、本書では言及はない。インドの紅藻の分類については1930年代のF. Boergesen博士（デンマーク）の先駆的な研究以来、マドラス大学の先の教授M. O. P. Iyengar博士と今回の著者となった3人を含む彼の弟子達を中心とする研究により多数の論文が出たが、それらを纏めた書物は皆無であった。この点本書刊行の意義は大きく、分類編の後半の刊行が待たれる。しかし、本書には多くの難点もある。図にスケールの表示がなく、紙質のせいもあって図が鮮明でないこと、掲載されている図や写真は外国産の、しかも外国人によるものが多いこと、最新の論文の引用が少ないこと、電頭に基づく記述が極めて少いこと、文献欄に引用文献の脱落が多くあること、索引がないことなどである。

(千原光雄)

□三浦昭雄(編): 食用藻類の栽培 150pp. 1992. 恒星社厚生閣. ¥2,500.

採苗し、たねをまいて栽培する海藻は戦前は皆無であったが、昨今はアサクサノリ、ワカメ、コンブは勿論のこと、モズク、イワズタなどおよそ食用となる藻類のほとんどが人工栽培されるようになってきた。藻類の人工栽培には生活史・生理・生態などの知見が基礎となる。本書は食用藻類の栽培技術の実際面を述べるとともに、それらの純生物学的知見の解説にも紙面を割いている。扱われる藻類はノリ(三浦昭雄)、ヒトエグサ(喜田和四郎)、ワカメ(秋山和夫)、コンブ(川嶋昭二)、オキナワモズク(新村 巖)、アオノリ

(大野正夫・松岡正義)、クビレズタ(当真 武)、マツモ(内山 努)、ヒジキ(四井敏雄)、スイゼンジノリ(右田清治)、オキチモズク(右田清治)、ハバノリ(右田清治)、ムカデノリ(右田清治)、イシモズク(四井敏雄)、ウミゾウメン(四井敏雄)、ミル(四井敏雄)、トサカノリ(喜田和四郎)(カッコ内は著者名)の17種であり、ほかに食生活の面で最近注目されている藻類の食物繊維についての解説(平野敏行・鈴木 健・白井隆明)が11頁に亘って収録される。本書は1991年春開催の日本水産学会大会のシンポジウムの講演を中心に、質疑応答と総合討論の要旨を加えてつくられたもので、今世紀後半のおよそ40年間に、主として日本で挙げた食用藻類についての研究成果の概略を知るにも好適である。(千原光雄)

□徳田 廣, 川嶋昭二, 大野正夫, 小河久朗: 図鑑 海藻の生態と藻礁 198pp. 1991. ¥14,800.

202種の海藻(海草も含む)と海藻群落造成の目的で作られた各種の人工藻礁への海藻の成育の様子が美しいカラー写真により収められる。前半の海藻の生態の部では、日本沿岸を5つの分布域に分け、それぞれの代表的な種類を扱い、後半の藻礁の部では、種々の異なるタイプの礁や表面を硫酸第一鉄で処理した礁などにおける海藻群落形成過程を丹念に撮影、紹介し、さらに終りに藻礁の歴史と各種藻礁の図解入り解説一覧を添えている。またアマノリ、ワカメ、コンブなど7種の海藻養殖および寒天づくりの風景の触りの写真が所々に挿入される。編集および執筆者は学者・企業人がつくる「海藻魚礁(藻礁)研究会」のメンバーであり、天然の海で海藻がどのような姿で生え、またいかにして人工藻礁に海藻を成育させるかを中心に、素人が見てもわかる海藻図鑑を念頭において本書を作ったという。収録の写真の多くは潜水撮影によるものであるが、その色調はなかなかの見事さで、見ていて楽しい。楽しみながら海藻の成育の様子を知り、そして名前を知ることが出来る。(千原光雄)